現地で活動した国際要員の声

紛争×看護師

看護師　朝倉　裕貴

最新の派遣先：南スーダン（ICRC）

プロフィール紹介

東京都生まれ。武蔵野赤十字病院勤務。

派遣歴：イラク（2013年）、南スーダン（2016年、2017年、2019年）

国際要員を目指したきっかけ

看護師になってから最初の勤務先で外国人の患者さんに対応したことがありました。その時、思うように患者さんとコミュニケーションをとることができず悔しい思いをしました。「国籍を問わず、多くの人に手を差し伸べることができるようになりたい」。勤務の傍ら英語の勉強をはじめ、その後、カナダへの語学留学を決めました。カナダでは、語学学校に通いながら、病院でボランティアをし、最終的には病院からオファーを受けて、1年半ほど現地の病院の救急外来で働きました。思い返すと、その頃に初めて「多様性」を実感して働くことができたように思うし、そういった環境が肌に合っていたと思います。ただ、リーマン・ショックの影響でビザが更新できずに日本に帰国することになって、「次は基盤がしっかりした組織に身を置きつつ海外にチャレンジしたい」という思いから、武蔵野赤十字病院の門を叩きました。

国際要員として登録されるまでの道のり

武蔵野赤十字病院に勤めはじめて2年目の秋、名古屋第二赤十字病院（以下、名二）で開催された「戦傷外科研修」に参加しました。その際、後にフローレンス・ナイチンゲール記章※1を受賞された国際救援の大先輩のお話に感銘を受けました。「この人の下で学び、紛争地医療に携わりたい」と異動を希望。名二の国際医療救援部※2で3年間、集中的に国際活動を学ぶ機会を得ました。特に、私はICRCの活動への参加を目指していたので、「手術室看護」を中心とした知識と技術を強化しました。病院の教育方針の下、医療や看護に加え、国際情勢、経済、歴史についても、日本語・英語問わず資料を読みあさり、学びを深めました。日々の業務と、国際要員を目指す上でのスキルアップを両立するため、周囲から求められているものと私自身が目指したいもののバランスが崩れていないか常に意識することを心掛けていましたね。

現地での活動のやりがいは？

現地での生活は決して楽なものではありませんが、現地スタッフが私たち外国人スタッフと働くなかで、また、教育を受けることで成長、自立していく姿を見ることはとっても喜ばしいことです。また、ICRCは国際機関であることもあり実力主義なので、やったらそれだけ評価してもらえるのはやりがいがあります。

今後の目標

今まで通り、ICRCの事業に参加し、紛争地で苦しむ多くの人々の力になりたい。さらに国内では、これらの海外での経験を一般の方々にも広く知ってもらえるように、講演などの広報活動や、人材育成にも積極的に携わっていきたいです。

※1 フローレンス・ナイチンゲール記章とは2年に一度、顕著な功績のあった看護師らに贈られる世界最高の記章である。

※2 名古屋第二赤十字病院は、全国に5施設ある、国際医療救援拠点病院の1つとして、院内に国際医療救援部を設置し、平時より、緊急救援や開発協力事業にかかわる人材の養成、確保、体制作りを担っています。

関連記事

- 南スーダン：助かる命を助けたい（2016年10月14日）